今こそ福島の力になる

一橋大学大学院法学研究科 准教授　阿部 辰雄

今回紹介するのは、『東電福島原発事故自己調査報告』（細野豪志／著、開沼博／編、徳間書店、1,870円）です。この事故に関しては、専門的かつセンシティブな内容のため、私たちに伝わる情報は余計な部分がそぎ落とされた政府公式の情報か、特定の思想から発せられる科学的根拠のない非常にバイアスのかかった情報であることがほとんどで、本当のところは何が起きていたんだという気持ちを抱いていました。それと同時に、私は、この事故の当時は、映像をテレビで眺めることしかできませんでした。そして「この問題はあまりに深刻で大きすぎる」と、目を背け続けてきました。

『東電福島原発事故自己調査報告』 細野豪志／著
開沼博／編　徳間書店

本書は、原発事故収束担当大臣として事態処理の中枢を知る細野豪志氏が、事故から10年を経て、第１章で原発事故時のキーパーソンに、第２章で復興に挑戦する地元住民にインタビューを行い、第３章で細野氏が今なお抱える福島の課題への解決策について提言を行うものです。

このように、キーパーソンの口から語られる生の情報を歴史的に記録することは、「東電福島原発事故」という事案に対するアプローチとして非常に有効な形であると感じました。10年が経ったからこそ語ることのできる詳細かつリアルな経緯が語られており、公式の文書としてまとめられることからは得られない、事故対応の側面が見えてきます。その詳細はぜひ本書を読んでいただきたいですが、私は元陸上自衛隊東部方面総監／陸将のインタビューで、この問題が日米同盟の危機にまで及んでいたことには衝撃を受けました。やはり、公式に発せられる情報では「未然に防ぐことができたが大きな危機であった」事案は見えてこないものだと感じました。

ともすれば敵を作ってしまうような内容を語ってくださったキーパーソンの方々と、今なおそうした方々と関係を継続している細野氏に敬意を表します。

また、最後に細野氏が挙げる課題の多くは、様々な研究から科学的には安全と結論が出ているにもかかわらず、それが知られていないことに起因するものでした。これらは、私たち一人一人が認識を改め、それを伝えることにより解決することができる問題です。

私のように問題の深刻さ・大きさゆえに目を背けてきた職員の皆さんもたくさんいらっしゃるのではないでしょうか。今こそ私たちも福島のために力になれる時である、そんな新たな認識を与えてくれる本書を強くお勧めしたいです。